

【恒存思想と荷風の共通点】(拙発表文:『傳統にたいする心構』より。恒存理論と荷風文學の圖的言ひ換へ)

* 文化(D1)のある處(換言すれば自國の歴史Cとの「適應正常化=非沈湎」が圖れてゐる國)では、「E」を至大化させる「型・仕來り・様式・儀式」が形成されてゐて、その「型・仕來り」が歴史との關係(文化)を形ある「物」として生き方に反映(Eを至大化)させてくれるのである。文化(D1)のある國は「仕來りE」を持つが故に、「對象・言葉との距離測定不能(言葉に呪縛)」が原因の、適應異常や狂氣の回避が可能となるのである。その事柄を「右圖」で言へば、「D1の至大化=Eの至大化」と言ふ事になる。「型・仕來り・様式・儀式」は生活・言葉への囚はれから人を救出してくれるのである。更に換言すれば、平生足をさらはれてゐる様な現實的平面から意識を立ち上がらせててくれる。なぜにそれが可能となるかと言へば、「型・仕來り・様式・儀式」に内在する働き、恒存の文章に従へば、以下枠文のダイナミズムをそれは宿してゐるからなのであると理解する。「そもそも動作や作用、さらに人間の抽象的な營みを名詞化しようといふ働きそのものが、主體である自分を對象から分離し、距離をつくらうとする衝動なのです」(全三P204『日本および日本人』)

〔荷風の文學〕: 江戸情緒に沈湎(「マナリズムに沈湎」P218下)する事で明治への沈湎を免れた。...

* 荷風は、右圖の有機的形態を回復せんとして、即ち「素材のままの現實(明治)に様式を與へなければならぬ。それが現代の藝術家に課せられた任務」として、荷風は以下の能動(文學行動)を取つたのだ、と恒存は謂ふのである。

〔歴史・時代(C)・文化(D1)・風景(F:自然・生活・習俗・家具・調度・衣裳等)・固定化(E:様式化)との關聯〕: P218上～P219上より。

* 「人間と外部の風景(F)とのあひだに感情の交流が行はれるためには、どうしても固定した(E)風景が必要」。

* 「風景(F)の固定化(E:様式化)があることによつて、それに反應する情感を鍊磨してきた。この固定化(E:様式化)がマナリズム」。

